

金縷の衣

杜

秋

娘

君きみにすすむお惜しむな莫かれ金きん縷るのい衣

君きみにすすむま須からお惜しむべしし少しょう年ねんのとき時

花はな開ひらいてお折たるえにな堪えなば直ち須まらか折おるべし
花はな無なきま待まつてお空あくえ枝えをお折なるな莫かれ

【作者】杜秋娘(約七九一年—?)・唐代・金陵。の歌妓。「杜」が姓で、「秋」が名。「娘」は、「嬢」。「杜秋さん」の意。美人で有名。十五歳で浙西

觀察使の李錡(りき)の妾となる。後、穆宗(ぼくそう)に命じられて皇子の守役となる。

【語釈】*金縷の衣：金糸で織った高価な衣。 *少年の時：若い時。 *折るに堪えなば：折るべきである。折る値打ちがある。

【通釈】あなたに勧めるが、金糸で織った衣服など大切にすることはやめなさい、あなたに勧めるが、若い時を大事に過ぎなさい。

花が開いて、折り取るにふさわしい時期だったら直ちに折り取るべきで、花が散ってから慌てて、花のない枝を折っても全く空しい事だ。

【備考】いいたいことは、どんな高価な衣類でもお金で買えるが、若さはお金では買えない。年を取って後悔することなく、やりたい事は多いにやり、人生を有意義に過ごすように。若い時に好きなことをやろう、酒を飲むべしは李白や他の詩人も詠っている。女性の詩人が若い時の人生観を詠っているのは珍しい。